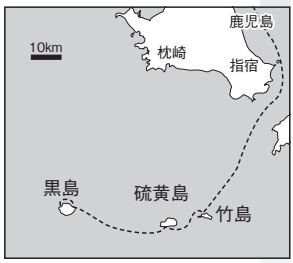
●定住促進●

鹿児島県竹島・硫黄島・黒島

島々の自然を満喫するプログラムづくりと地元食材の特産品化

鹿児島県三島村定住促進課長　宮田雄次



◆新たな観光アクティビティの開発へ

三島村（みしまむら）は、鹿児島市から南西へ一〇〇～一五〇キロメートルの洋上に点在する竹島、硫黄島、黒島の三つの島からなり、九州本土から台湾に至る南西諸島の最北部に位置している。本土との交通手段は村営による定期船のみであり、週三便、鹿児島市と三つの島を結んでいる。平成二一年度からは村民の利便性向上および村の活性化のため、本土との一日一便体制確立を目指して年間一六航海、三島村黒島と鹿児島県枕崎間の航路延伸事業を実施している。

島に高校はなく、中学校卒業後は島外に出て行かざるを得ないことや、島に定住したくても就労機会に乏しいことなどから、若者の流出が進むと同時に高齢化が進み、住民が協働して行っている定期船の荷役作業、水道・電気などのライフラインの維持・保守にかかる人材の確保にも支障をきたし、地域コミュニティの崩壊につながる恐れがある。

交流人口増加対策として本村では、平成六年から世界的ジャンベ奏者ママディ・ケイタ氏の来島を契機にジャンベ交流の輪が広がり、ジャンベの島として国内外からジャンベ愛好家が訪れるようになったが、単発的なイベントで終わっていたため、ジャンベを取り込んだ新たな観光アクティビティの開発が必要と考えた。

◆各種体験プログラムの作成と地元食材の特産品化

そこで二五年度から離島活性化交付金を活用し、「三島村特産品開発支援事業」として、七色の海を持つ硫黄島や、特に透明度の高い海をもつ竹島においては、シーカヤックを取り入れて現地の若者のインストラクター免許取得をフ

ォローアップし、ジャンベとシーカヤックを同時に体験できるメニューづくりに取り組んでいる。

「ミニ屋久島」と称される黒島においては、実際に山登りの達人を黒島に連れて行き、体験をしてもらいプログラムの作成を依頼した。まずは、地元ガイドの養成が急務で、ツアー人数は五～六人がベスト。ガイドと運転手をいれて一台で移動できる人数である。登山を行い、そのまま宿へ。翌朝は岬からご来光を拝み、朝食は船内で。完全にガイド（案内人）が付いて回るので島内移動もスムーズで、一泊二日の旅行でじつに内容の濃いプログラムが出来る。

これらのメニューを実行に移すために地域住民と一体となり取り組んでいるところである。

実施事業の目玉として、手つかずの自然を生かした新しい特産品づくりがある。本村は、三島四地区という特殊な事情から、食に関しても独自の発展をしてきた。どの島にでもある、超高級食材の大名竹の子にしても、島々で食べ方が異なる。

島々によって、いろいろな食材の面白い食べ方があるのはいいが、三島村を全国にＰＲし、将来的に特産品製造の雇用の場をつくるためには、味を統一し商品化する必要もあると考えるため、平成二六年度は専門家に委託し、食材開発や調理方法、販売ルートなどを地域住民と最初からつくり上げるべく、各島で検討会を開催している。

将来的には新特産品（食品三品）をつくり上げ、村民に紹介し、村民がすでに独自で開発している多数の食品と

竹島で開催されたシーカヤックのインストラクター指導者検定の様子。

シーカヤック指導者検定の学科講習（竹島）。

うまくマッチングさせた「三島ブランド」として売り出せればと考えている。

ジャンベ、シーカヤック、登山などを体験し、小腹がすいたら特産品を食してほっとする。また食べたくなったら旅館で食し、定期船の売店で購入して食する。いつまでも忘れない、何度も食べたくなるような三島村のおいしい特産品ができるよう日々努力していきたい。

◆交付金の拡充で極小外海離島の活性化を

最後に、離島活性化交付金の活用としては、定住対策のため、空き家改修事業を要望している。主に畜産を中心に定住の案内をしているところだが、今後、観光案内人・特産品などを活かした雇用の場ができればと考えており、特にアイデア豊かな若者の定住者に期待している。最近では三島の若者によるスポーツ大会交流も増えてきており、住民の盛り上がりによっては、定住者、観光客も一同に食して楽しめる場として、村民手づくりの焼台を利用し、島独自の食材を利用したバーベキューハウスなどの建設も考えている。

離島における交付金適用事業の拡大と、財政難である極小外海離島の交付金利用促進のためにも、補助率の嵩上げは重要であり、今後、国に強く要望していきたいと考えている。■

黒島の櫓岳にて、トレッキングガイド育成研修を実施。